

(五) 紀伊國伊都郡高野たかのの峯に入定の處を請うけ乞はせ被らる表

弘仁六年(八一五)、空海はその独自の密教世界をまとめて『弁頭密二教論』を著わし、その翌年の弘仁七年(八一六)には最澄と決別する。

そして同年六月、京の高雄山寺にいる空海は、嵯峨天皇に高野山下賜を奏上する。それに対して嵯峨は、翌七月には異例の早さで紀伊国司への太政官符をもつて裁可し、空海の高野山造營の願いをかなえる。この頃の両者の関係がいかに深かったかこの一事をもつてもうかがえる。

然るに、高野山山麓の天野の里に空海が以前からそこで山の民と交わり時々滞留していた丹生都比売神社があった。この社に、この土地の人々が篤く信仰する丹生明神と狩場明神が祀られていた。

彼ノ山ノ裏ノ路辺ニ女神アリ。名ヅケテ丹生津姫命ト曰フ。

其ノ社ノ廻リ二十町許リノ沢アリ。人到リ着ケバ即時ニ傷害セラル。

方ニ吾ガ上登ノ日巫税(祝)ニ託シテ曰ク。妾、神道ニ在テ威福ヲ望ムコト久シ。

方ニ今菩薩此ノ山ニ到ル。妾ガ幸ナリ。(『御遺告』)

この『御遺告』の記述によると、「ある日、空海が高野山に登った時にある犬飼に出会ったのだが、彼は名前や素性を明かさなかった。そこで空海は山のまわりを調べてみると）高野山の奥に丹生津姫命（丹生都比売大神）という女神が祀られていることがわかった。その周囲には十町の沢が流れていて、そこに人が近づくと身体に傷をつけることになる。

私が高野山に登った日、（丹生津姫命が）巫税（祝）に託して言った。＞私は神道にある身ですが威福（仏法、密法）を永く待ち望んでいました。今まさに菩薩（空海）がこの山に来てくれました。（それが何より）私の幸せです」というのである。

巫税（祝）とは、巫女のような神の言葉を人間に媒介する者のことであろう。この場合男で、例の犬飼のことにように思える。空海はこの巫税（祝）を代理人として高野山の取得と造営を丹生津姫命から許されたことになる。これを案ずるに、高野山は天野に祀られている丹生津姫命（丹生都比売大神）の神域にあって丹生の一族がこれを領していたが、この神域に密教僧の空海が入ることを神自身が許し歓迎したということであろう。

神が菩薩を容認した。そればかりか、近づくと人体を傷つけるほど毒性の強い水銀の採掘や利用までを許可したとの意味でもあろう。すでに神仏習合が行われていた。空海の高野山造営はこの丹生都比売大神と土地の神々に深く帰依していた天野の里の人々との親交なくしてはありえなかったということである。

空海は、山岳修行の熟達者であった。「ヤマ」に入るしきたりや礼儀作法に通じ、「ヤマ」で鍛えた霊的なパワーにも事欠かなかった。その上、「ヤマ」の民が見たこともない不思議な密教儀礼や聞いたこともない不思議な真言をあやつった。水銀の精製や利用方法やその背後のある道教にも通じていた。山の民が引きつけられるカリスマ性に満ちていた。天野の丹生一族は、氏神である丹生都比売大神もろとも空海を歓迎し帰依したのである。空海は高野山の造営にあたって、先ずこの「丹生明神」と「狩場明神」とを山上に勧請した。今、壇上伽藍の西側に鎮座している。

南海電鉄「橋本」駅前からタクシーを走らせること約三十分、紀ノ川を渡り九度山の慈尊院の近くを通り、梅や柿の木が斜面いっぱい枝を広げる山里の道をたどるとやがて道が下りになり、やや行くと急に人里がひらけてくる。丹生都比売神社はその人里にある。朱塗りの鳥居をくぐる。目の前にあざやかな朱塗りの太鼓橋、その奥に大樓門が見え隠れしている。朱に塗られた橋を渡って神域に入る。まさに丹生の世界である。

昔は、太鼓橋がかかる池の西側に「大庵室（おおあぜち、祭祀の際、学侶方の僧侶の宿所）」と「長床（祭祀の際、行人方の僧侶の宿所）」が、池の中島には「一切経蔵（仁和寺から贈られた一切経を安置）」と「宝蔵（行人方の僧侶が祭祀の時に使う祭具を保管）」があり、東側には「不動堂」「山王堂」「多宝塔」「御影堂」などの寺院様式の建物が並び、祭祀の際には高野山の真言僧も出向列座して神祇の法を修したことが偲ばれる。

神域に入ると空にその軒先をいっぱい広げて重文の大楼門が建っている。朱塗りのみごとな門である。その楼門のところから祭神を拜むのである。

祭神は四明神で、向って右から、第一殿の「丹生明神（丹生都比売（にぶつひめ）大神）」、第二殿の「狩場明神（高野御子（たかのみこ）大神）」、第三殿の「氣比明神（大食都比売（おおおげつひめ）大神）」、第四殿の「厳島明神（市杵嶋比売（いちきしまひめ）大神）」である。

「丹生明神」は、今から一七〇〇年前の神功皇后の頃に、この山里に祀られたと伝えられる（『日本書紀』）水銀の神で、鉾山に関与して地下資源を司るのである。

「狩場明神」は、鉾脈を求めて山中を涉獵する神でヤマの案内や導きの神であり高野山一帯の地主神でもある。空海が高野山に入る際空海に奉仕した「狩場明神」を祖先ともどもここに祀ったという。

「氣比明神」と「厳島明神」は、北条政子が今から約八〇〇年前に寄進した。「氣比明神」は、「元寇の役」にかかわる軍神。「厳島明神」は、音楽芸能・航海安全の神で、この二神に平和安穩・鎮護国家を祈るのである。

空海は高野山造営の以前からこの丹生都比売神社にかかわりをもち、滞留の際は住坊「曼荼羅院（庵）」に止宿したといわれている。「曼荼羅院（庵）」は、現在駐車場になっている広場のあたり、つまり「大庵室」のあったところの近くにあったらしい。この「曼荼

羅院（庵）が、高野山の造營の際山上に移され「山王院」といわれ、後に「金剛峯寺」となつて現在に至つてゐる。

空海は、嵯峨から高野山を下賜されるとただちにその造營にとりかかった。

まず弘仁七年（八一六）七月から年末にかけ、實慧や泰範らの弟子を高野山と紀ノ川南岸の山麓に派遣し現地調査をさせた。高野山と紀ノ川南岸の土地は、若き日の空海が山林修行者として幾度となく渉獵したところである。空海は弟子たちに、高野山の地形・地理や水銀鉞脈のこと、また山麓の丹生の一族と丹生都比売神社のことなど詳しい事情を教え、山上伽藍の予定地や資材・人夫の調達などについて具体的に指示をしたであらう。

空海の気持ちがおかしくはない。高野山寺はあくまで和氣氏の私寺であり、空海の方が意のままにはならない仮の住まいである。別当に任ぜられた東大寺は前の年に離れてゐた。帰朝から十年にして空海に自らの密教を集大成するための道場、私寺開創のチャンスがきたのである。

おそらく實慧や泰範らは、先ず山麓の天野にある丹生都比売神社に向かつてであらう。空海が住房とした境内の曼荼羅院に止宿し、そこを当面の根拠地としたであらう。ここで、彼らは丹生一族の主だった者に資材の調達と運搬、道路や水の治山治水、資金や食糧の確保、人夫の世話ほか工事道具や生活用品など一切の助力を要請し、良い答えをもらえたものと思われる。

この天野の里のすぐ近くを、高野山と紀ノ川そして奈良や京を結ぶ旧表参道が通っている。この道をたどって紀ノ川に向い山を降りていった先、紀ノ川の南岸に慈尊院がある。

弘仁七年（八一六）の創建というから、おそらく實慧や泰範らが紀ノ川の水運に至便なこの要衝の地に建設資材や人夫・生活必需品などを集め、山上にあげるための根拠地としてここに堂宇を建立し、あわせて山上伽藍が完成しそこに空海以下弟子たちが居住できるようになるまでの間の宿所あるいは嚴寒期修行の道場とし、また高野山造営に関する庶事万端をつかさどる寺務所（政所）としたものと思われる。この時、紀ノ川の渡し場にあった「丹生官省符神社」が、今は慈尊院境内に移されている。

寺名の慈尊とは慈氏菩薩、すなわち弥勒菩薩のことである。空海が高野山の造営に苦心していることを知った母阿古屋（「玉依（姫）」が讚岐から出てくるものの女人禁制の山上に上がることかなわず、空海は月に九度高野山から下りてきて母をたずねた。この一帯を九度山というのはそのためである。母は、空海が入定する一ヶ月前の承和二年（八三五）二月に亡くなるのだが、空海は母が弥勒菩薩になった夢をみ、弥勒尊の像一体を謹刻して母の廟に祀ったという。この寺を別名女人高野という。

弘仁八年（八一七）、空海は再び實慧・泰範たちを高野山に入らせて平坦な地を扱ばせ、山上の根拠地として堂宇（一・両の草庵）を建てさせる。

そして翌弘仁九年（八一八）十一月、勅許後はじめて自らも高野山に登った。おそらく實慧・泰範たちは先に山上に上り空海の一行を迎えたであろう。この時には丹生の一族や土地の有力氏族あるいは治山治水に明るい山の民や資材運搬・建築土木に堪能な人夫たちも集まっていたと思われる。寢食等の準備も調っていたであろう。

さらに翌弘仁十年（八一九）の春、空海は山上を七里結界して密教による作壇法（地鎮鎮壇作法）を七日間修した。今の「根本大塔」のところだったという。その表白に言う。

沙門遍照金剛、敬テ十方ノ諸佛、兩部大曼荼羅海會ノ衆、五類ノ諸天、及ビ國中ノ天神地祇、竝ビニ此ノ山中ノ地水火風空ノ諸鬼等ニ白サク。夫レ形有リ識有ルモノ必ラス佛性ヲ具ス。佛性法性、法界ニ遍シテ不二、自身他身、一如ト與ナルニシテ平等ナリ。之ヲ覺ル者ハ常ニ五智ノ臺ニ遊ビ、之ニ迷ウ者ハ毎ニ三界ノ泥ニ沈ム。是ノ故ニ、大悲大日如來獨リ三昧耶ノ妙趣ニ鑿ミ、六趣ノ塗炭ヲ悲歎ス。如實智ノ雷法界ノ殿ニ震イ、祕密ノ曼荼羅閻浮提ニ傳ワル。金剛薩埵龍猛菩薩に傳授サレテ従リ師々相傳シ、今ニ迄ルマデ絶エズ。遂ニ弘教和尚、辨正三藏、錫ヲ振テ東ニ來タリ、漢ノ地ニ流傳シテ群生ヲ拔濟ス。然リト雖モ、地ハ泓海ヲ隔テ、人ノ機未ダ熟サズ、教ハ祕閣ニ韞サレテ未ダニ此ノ朝ニ及バズ。ム甲、幸ニ諸佛ノ加持力ト幽明ノ機熟ノ力ヲ頼ミ、去ンジ延曆二十三年ヲ以テ彼ノ大唐ニ入ル。大悲胎藏及ビ金剛界會、兩部ノ大曼荼羅ノ法、竝ビニ一百餘

部ノ金剛乘ヲ奉請シテ、平ラカニ本朝ニ帰ル。地ハ相應ノ地無く、時ハ正シク是ノ知己ニ非ズ。日月荏苒トシテ忽チ一紀ヲ過ゲ。

爰ニ則チ、輪王運ヲ啓イテ此ノ法ヲ弘メント擬スルニ、必ズ須カラク其ノ地ヲ得ベシ。四遠ヲ簡ビ擇ブニ此ノ地ヲト食ス。是ノ故ニ、天皇陛下、特ニ恩璽ヲ下シテ此ノ伽藍ノ處ヲ賜エリ。今、上ハ諸佛ノ恩ヲ報ジテ密教ヲ弘揚シ、下ハ五類ノ天威ヲ増シテ群生ヲ拔濟センガ為、一ラ金剛乘秘密教ニ依リテ兩部大曼荼羅ヲ建立セント欲フ。仰ギ願ワクハ、諸佛歡喜シ、諸天擁護シ、善神誓願シテ、此ノ事ヲ證誠センコトヲ。

所有ル、東西南北、四維上下、七里ノ中ノ一切ノ惡鬼神等ハ、皆我ガ結界ヲ出テ去レ。所有ル、一切ノ善神鬼等ノ利益アル者ハ、意ニ随テ住セヨ。又願ワクハ、此ノ道場ハ普ネク五類諸天、及ビ地水火風空ノ五大ノ諸神、并ビニ此ノ朝開闢已來ノ皇帝皇后等ノ尊靈、一切ノ天神地祇ヲ以テ檀主ト爲ス。伏シテ乞ウ、一切ノ冥靈晝夜ニ擁護シテ此ノ願ヲ助ケ果タサンコトヲ〔『性靈集』「高野建立の初の結界の時の啓白文」〕。

と。

空海は先ず山上を七里結界して諸魔を排除しそこに丹生・狩場（高野）の二明神を勧請した。清められた「野（ノ）」にサトの神を祀り、そこを現（うつ）の仏国土（ヤマ・山上他界）とみなすことで、サトの丹生一族やヤマの民に新しい神仏習合のグラウンドデザインを示して見せたのである。

人々は、かつてこの山域で見たことのある無名の若き乞食僧が、いつのまにか天皇をも動かし高野山に新しい神仏習合の靈域を造営する、稀有のディベロッパ―となって現れたことに大いに沸いたであろう。

高野山の造営は、当然ながら長くかかった。空海は造営に着手してから二十年後の承和二年（八三五）に入定する。存命中に完成を見たのは空海の構想の半ばではなかったか。

●本文…沙門空海言 空海聞 山高則雲雨潤物 水積則魚龍產化 是故 耆闍峻嶺
能仁之迹不休 孤岸奇峯 觀世之蹤相續 尋其所由 地勢自爾 又有台嶺五寺 禪
各比肩 天山一院 定侶連袂

書き下し…沙門空海言す。空海聞くならく。山高ければ則ち雲雨物を潤し、水積れば則ち

魚龍産化す。是の故に、耆闍ぎじゃの峻嶺つたんに能仁あたの迹休あとまず、孤岸の奇峯に觀世あつの蹤相續あとす。

其の所由るところを尋ねるに地勢自ら爾しかり。また、台嶺たいれいの五寺に禪客肩ならを比べ、天山てんさんの

一院じようりやうていに定侶袂じようりやうていを連ねること有り。

私訳…沙門空海が申し上げる。空海が聞くところによれば、山が高ければ雲や雨が生物を
うるおし、水が魚や龍が生れ育つ。その故に、耆闍嶺山の鷲が翼を広げたような険しい
峯は积尊の説法の跡（奇瑞）を残し続け、補陀落山の不思議な形をした峯は觀世音菩薩
の靈威を続け持っている。その理由を尋ね聞くと地形が自らそのままなのである。また、
五台山の五大禅処に禅定（三昧行）に参じる人が集って肩を並べ、天台山の国清寺には
禅定（止観行）の修行僧が列をなしている、と言う。

※註記1…産化は、産が出産（胎生）、化が孵化（卵生）。

※註記2…耆闍は、耆闍崛山(ぎじゃくっせん)、釈尊が説法した靈鷲山(りようじゆせん)。

※註記3…能仁は、釈尊。釈迦(シヤークヤ・ムニ Sakyamuni)の「Sakya」を「能仁」、
「muni」を「mauna」として「寂黙」と言う。

※註記4…孤岸は、直後の文言からして觀世音菩薩の淨土補陀落山。

※註記5…觀世は、觀世音菩薩。

※註記6…台嶺は、五台山。

※註記7…五寺は、五台山の五大禪処。殊像寺・顯通寺・塔院寺・菩薩頂・羅睺寺。

※註記8…天山は、天台山。

※註記9…一院は、國清寺。

※註記10…定侶は、禪定修行をする僧侶。

●本文…是則 國之寶 民之梁也 伏惟 我朝歷代皇帝 留心佛法 金刹銀臺 櫛比朝
野談義龍象 每寺成林 法之興隆 於是足矣 但恨高山深嶺 乏四禪客 幽藪窮巖
希入定寶 實是 禪教未傳 住處不相應之所致也 今准禪經說 深山平地 尤宜修禪

書き下し…是れ則ち、國の寶、民の梁なり。伏して 惟れば、我が朝歷代の皇帝心を佛法

に留む。金刹銀臺は櫛のごとく朝野に比び、談義する龍象は寺毎に林を成す。法の興

隆是に於いて足る。但、高山深嶺に四禪の客乏しく、幽藪窮巖に入定の寶稀なるを恨む。

實に是れ、禪教未だ傳らず、住處相應せざるの致す所なり。今、禪經の説に准ずるに、

深山の平地尤も修禪に宜し。

私訳…これは国の宝（有能な国の人材）であり人々の中心的存在になる人たちである。伏して思うに、（仏教伝来以後の）わが国の歴代の天皇は仏法に心を留め、立派な堂塔伽藍が櫛の齒のように朝廷・民野を問わず建ち並び、経論を議論する徳のすぐれた高僧が寺院ごとに林のように雲集している。仏法の興隆はここに至って十分なのであるが、ただ、高い山や深い嶺に入つて（色界の）四禪定を修行する修行者が乏しく、深山幽谷の草むら険しい岩で禪定を行う修行僧が稀なことが恨めしいのである。まことにこれは、まだまだ瞑想行と教義の一致が伝わっておらず、修行者の住する所が相応していないからである。今、瞑想行の經典の説に准ずれば、深山の平地が瞑想行には最も適しているのである。

※註記1…實は、有能な国の人材。

※註記2…梁は、中心的な存在。

※註記3…金利銀臺は、立派な堂塔伽藍。

※註記4…龍象は、徳のすぐれた高僧。

※註記5…幽藪窮巖は、立派な堂塔伽藍。

※註記6…修禪は、瞑想行（三昧行、止観行）を行うこと。

※註記7…四禪は、色界の四禪定（初禪・第二禪・第三禪・第四禪）。

※註記8…幽藪窮巖は、幽谷の草むらや深山の険しい岩。

※註記9…禪教は、瞑想行（禪）と教義（教）。

※註記10…住處は、修行者の住する所。

●本文…空海 少年日 好涉覽山水 從吉野 南行一日 更向西去 兩日程 有平原

幽地 名曰高野 計當紀伊國伊都郡南 四面高嶺 人縱絶蹊 今思 上奉爲國家

下爲諸修行者 芟夷荒藪 聊建立修禪一院 經中有誠 山河地水 悉是國主之有也

若比丘 受用他不許物 卽犯盜罪者 加以 法之興廢 悉繫天心 若大若小 不敢

自由 望請蒙賜彼空地 早遂小願 然則 四時勤念 以答雨露之施 若天恩允許

請宣付所司 輕塵震辰 伏深悚越 沙門空海 誠惶誠恐 謹言 弘仁七年六月十九

日 沙門空海上表

書き下し…空海少年の日、好んで山水を涉覽し、吉野より南に行くこと一日、更に西に向

つて去ること兩日程りょうじつほどにして、平原の幽地あり。名づけて高野と曰う。計るに紀伊国伊都郡の南に當る。四面高嶺にして人蹤蹊絶えたり。今思わく。上は國家の為に、下は諸の修行者の為に、荒藪こうそうを芟り夷かげ、聊いささか修禪の一院を建立せん。經中に誠いましめ有り「山河地水は悉く是れ國主の有ゆなり。若し比丘、他の許さざる物を受用すれば、即ち盜罪を犯す者なり」。加しか以のみならず、法の興廢は悉く天心つなに繋がり、若しくは大、若しくは小、敢えて自由ならず、望んで請うに、彼空地を賜たまわることを蒙つて、早く小願を遂げん。然れば則ち、四時しいじに勤念ごんねんし、以つて雨露の施しに答う。若し天恩てんきん允許いんきよすれば、所司に宣付せんことを請う。輕しく震しん辰いを塵よこし、伏して深く悚しやう越えつす。沙門空海、誠まことに惶おそれ誠まことに恐れて、

謹まうんで言いす。弘仁七年六月十九日 沙門空海上表。

私訳・空海が少年の頃、好んで山や川を涉獵し、吉野から南に行くこと一日、さらに西に向つて二日ほどのところに、人が入っていない幽玄な平地があつた。高野という地名であつた。推測するに紀伊国伊都郡の南に當つた・四方ともに高い嶺がそびえ、人の踏んだ道は絶えてしまつていた。今、上は国家の（鎮護の）ため、下は諸々の山岳修行者のため、荒地の伸びきつた蔓草を刈り払い、少しばかり瞑想行のための道場を一つ建てたいと思う。『大乘本生心地観経』のなかに誠めがあり、「山や河や土地や水は皆国主の所有するところであり、もし比丘が他人が（自分に）分け与えないものを受けて使えば、盗みの罪を犯したことになる」と言う。それだけでなく、仏法の興廢は悉く皇帝の心に繋がつていて、大小にかかわらず（我々の）自由にはならない。切望して請い願うに、あの空地を賜わつて早く（私の）小さな願いを叶えたいのである。それがもし叶つたら、一日中勤めて念誦法を修し、もつて天皇の恩に答えようと思う。もし天皇の恩徳によつて許されれば、どうか所司に宣旨を下付していただきたく、軽々しく天皇の御心を汚し、伏して深く恐れ入つているところである。沙門空海、誠に惶れ誠に恐れながら、謹んで申し上げる。

※註記1…荒藪は、荒地の伸びきつた蔓草。

※註記2…芟夷は、刈り払うこと。

※註記3…經中は、『大乘本生心地観経』（般若三藏訳）。

※註記4 .. 雨露は、天皇の恩。

※註記5 .. 所司は、寺の事務職。上座・寺主・維那の三綱。

※註記6 .. 震辰は、震が宮殿、辰が衝立。天皇のこと。

※註記7 .. 悚越は、恐れること。